べて手にとるように分かるのである。読者はマルテルの苦難に涙しながらも、その堕落（！）から救済への歩みに安堵し、共鳴しうるのである。こういうふうに一般読者の感覚（これは同時にお上品社会が期待する感覚）とこの作家の感覚とのあいだに、ほとんどズレがない（らしい）点をとらえて、私はあえてマクレナンを本質的に大衆（通俗）作家と規定したのである。この規定が作家にとって名誉であるかどうかは別問題。とにかく「健全」なる一般読者が求めるものは、同時にマクレナンが求めるものだった。この「健全」なる作家が、カナダの社会で重んじられるのは故なしとしない。カナダの社会に限らず、大衆の感覚を逆なでしていては、ポピュラー作家としては大成しえないものである。

かつての、少なくとも六〇年代前半までのカナダの社会（リスペクタブル＝お上品な、という形容詞つきの）は、ベスューンのような存在を許容しえなかった。そして、みごとといっていいほど無視し、社会の意識から抹殺した。現在、周知のように情勢が一変し（カナダと中国との友好復活と、もちろんこのことは無関係ではない）、ベスューンは不死鳥のようにカナダにおいてよみがえり、その名は多くの人の知るところとなった。たしかトロント市のヨーク大学にベスューン・カレッジというのがあるはずだし、トロント近郊のスカーボロー市の高校にベスューンという名をつけるべきかどうかという論議が、昨年のトロント・スター紙で交わされているのを私は読んだ記憶がある。かつて悪評高いほど保守的で守旧的だったカナダのお上品社会は、一転して、異端分子に対し寛容になり、解放的になったのだろうか。それが事実とすれば、たしかに慶賀すべき傾向だが、私は世間の感覚（大衆文学の好みを含めて）のこういう急変を頭から信じこむ気持には、ちょっとなれないのである。一昔まえに私が感じた苛立ちを、いまなお忘れることができないからかもしれない。

私は以前ノーラ・ストーリー編の『カナダ歴史・文学辞典』（一九六七）が出たとき、二人のノーマン（つまりノーマン・ベスューンとE・H・ノーマン元駐日大使）が脱落している点からも分かるように、辞典としての項目の取捨が必ずしも公正でないことをある書評で指摘したことがある。その後、W・トイ編のこの辞典のかなり大部の増補版（一九七三）が出たが、それをみても二人の脱落は依然として続いているのである（CBC放送がベスューンのドキュメンタリーを放映してから8年も経つというのに）。わずかに最近出たJ・R・コロンボ編の『カナダ事項辞典』（一九七六）がノーマン・ベスューンに五十五行、ノーマン大使には「ノーマン事件」として二十三行の独立項目扱いを与えているのが目についたくらいで、この二人のノーマンの「復権」は、開かれた「新しい」カナダ社会においても、必ずしも担々とした道を辿っているわけでないように、少なくとも私には思われるのである。

（東京大学教授）

カナダ文学の重要テーマ

マーガレット・アトウッド

アトウッド

カナダ文学（英語、仏語とも）にひんぱんに見られるカナダの中心的シンボルは、間違いなくサバイバル（ラ・スルビバンス）――生き残ること――であろう。アメリカにおける〝フロンティア〟や英国における、〝島〟と同じように、この概念も多面的で、かつ適応性のある概念である。初期の探検家や開拓者にとってサバイバルは〝敵意をもった〟いろいろなものや原住民を目の前にして、生きる場所とその方法を手に入れてただ生きながらえるというにほかならなかった。しかし、サバイバルという言葉には、ハリケーンとか難破といった危機や災害から助かるという意味もある。カナダの詩には、このようなサバイバルをテーマにしているのが多い。これをただ生き延びるだけのサバイバルと対照させて、冷厳なサバイバルと称してもいいだろう。英国に征服されたあとのフランス系カナダにとって、サバイバルとは民族として存続し、異民族支配下で宗教や言語を堅持するという文化的サバイバルであり、米国が支配の度を深めている今日の英国系カナダでも、同じような意味をもつようになってきている。サバイバルには、また、原始的な爬虫動物のように、時代遅れになったあともどうやら生きながらえた、消滅した過去の遺物という意味もある。そういう考え方は、カナダが時代遅れだと信じている人びとの間によくでてくる。

その中でも中心的な考え方は、やはり一番目の、生き続ける、生きながらえるということであろう。カナダ人は、ちょうど病人を診察する医者のように、永久に国の脈をみることになるが、その目的は患者が元気になるかどうかではなく、はたして命が助かるかどうかということにある。〝フロンティア〟が意味する興奮、冒険、危険感といったものでも、〝島〟のもつ一人よがりとか安心感でもなく、ほとんど耐えがたいほどの不安をひき起こす――これがサバイバルの基本的想念である。カナダの小説は何かをなし遂げた人の話ではなく、北方だとか雪嵐とか船の沈没事故で他のすべての人々が死んでしまうという恐ろしい経験から逃げ帰ってきた人びとの話である。生残者には征服や勝利はなく、あるものは生き残ったという事実だけで、命からがら逃げ帰ってきたという感謝の念以外に、苦しみ